上越教育大学研究紀要　第40巻第２号　令和３年３月
Bull. Joetsu Univ. Educ., Vol. 40(2), Mar. 2021

小川未明の「野薔薇」と戦争
－自然の摂理と帰郷－

小　埜　裕　二*

（令和２年８月17日受付；令和２年11月30日受理）

要　　旨

本稿の目的は，多義的な解釈を許す未明童話「野薔薇」の結末部を，未明の意図や時代状況をもとに捉え直すことにある。未明は，野薔薇が枯れる表象を通して，権力や暴力に対抗しなければならないという思いを読み手に喚起させるとともに，自然に従う生き方を伝えた。自然に従うことは，未明独自のニヒリズムを受け継ぎながらも，この時期，未明にとっては，トルストイやクロポトキンの影響を受け，抑圧と強制を強いる国家体制から逃れ，自然状態に戻るアナキズムの積極的な実践を意味していた。未明は，野薔薇が不自然に枯れる場面を描くことで，戦争は運命ではなく，強いられたものであり，それに抗う必要と，その方法が自然への回帰であることを読み手に伝えた。

KEY WORDS
トルストイ　Tolstoy　　クロポトキン　Kropotkin　　平和主義的アナキズム　Pacifist anarchism
自然状態　Natural state　　相互扶助　Mutual assistance　　平和教材　Peace materials

1　「野薔薇」の問い

小川未明の「野薔薇」は「大正日日新聞」大正９（1920）年４月12日に発表された[1)]。本作は国境の石碑を守る青年と老人の間で芽生えた心の絆が，両国の「利益問題」から始まった戦争によって断たれる話である。「敵味方の関係」になることを「不思議」と思うほど，老人と青年は二人の間に生じた絆を自然なものと捉えていたが，二人の間に国境があり，国籍が異なる以上，戦争が起きると，その関係に変化が起こらざるをえない。「私の頸を持つて行けば，あなたは出世が出來る」と若者に言う老人の言葉は，自分が青年の敵ではないことを示していた。青年もまた「私の敵は他になければなりません」と言い，自分が老人の敵ではないことを述べる。青年が戦地へ行ったあとも，老人が青年を思いやる気持ちに変わりはなかった。しかし戦争で青年が亡くなったあと，野薔薇は枯れてしまう。

互いに思いあう二人の心の絆を無惨に断ち切るのが戦争であるという認識で本作は書かれている。しかし未明は，命を失った青年が馬に乗り，兵士を引き連れ，老人に会いに来る夢の場面を設けた。青年は老人に「黙礼」し，「薔薇の花」の香りをかいで去っていく。言葉を交わすことのない，老人の夢の中での再会という哀切な場面があるゆえに，むごい戦争に対する批判と平和を願う思いが高まると同時に，戦争で命が失われたとしても，魂や心の通い合いは不滅であることを暗示させた。国境に咲く野薔薇は，愛や友情，平和の象徴である。「利益問題」から戦争を起こした国と国の関係とは別に，相手を思い，敵味方とはならない自然の中で培われた人と人の関係がある。国が違っても，世代が異なっても，相手を思いやることはできる。そういう関係を築く尊さを未明は夢の場面を通して強調した。

「野薔薇」は平和教材として国語教科書に掲載されていたが，今は掲載されていない[2)]。昭和30年代頃から声高になった反戦運動の政治的な要求や，戦後の児童文学者による戦前の童話否定の攻撃の的となった「さよなら未明」[3)]の動き以降，「野薔薇」は批判にさらされ，平成２年度『国語六上』（光村図書）を最後に，教科書から姿を消した。「野薔薇」はどういう批判を受けたのか。佐々木守[4)]は昭和32年の文章中で「野薔薇」は，十数年前に「戦争はいやだ，二度とくりかえすまい」という悲痛な思いをもった国民の思いを「行動に起ち上れる力」にまで昇華させる力をもたないと述べる。佐々木の言葉の背景には，ソ連，アメリカ，イギリスによる相つぐ水爆実験等により，戦後十数年でまた新たな戦争が予感される状況となった危機的状況を迎えながら，実効性のある平和運動へと展開されていかない焦りがあった。「野薔薇」では，今の時代を生きる子供達は「とうてい成長できない」と考えたのである。

佐々木はさらに言う。「今のぼくたちにとって必要なのは，あまりにも多い「敵味方というような考えをもった人」たちが，どうして手をつなぎ，力をあわせて行くか，という問題ではないでしょうか。」「青年は老人を日頃のつ

*人文・社会教育学系

きあいのよしみで殺しはしなかったが，他の人たちをたくさん殺すために去って行ったのです。」「未明はなぜ野ばらを一月ばかりたった後に枯れさせなければならなかったのでしょう。なぜ老人は暇をもらって南の国へ帰らなければならなかったのでしょう，また青年の行為はばらの匂いをかぐことによって，正当化され得るのでしょうか。」

こうした問いかけは，単純化され，象徴化された「野薔薇」のような文学作品に対しては，しばしば起こりうる。とりわけ「野薔薇」の語りすぎない態度ゆえに，それが詩的世界として理解されず，テクストに隠された意味はなおざりにされ，現実的で政治的な意味が示されないという理由で批判された。批評は批評する者あるいは集団の思想や価値観によるところが大きい。批評する者の立つ現在の価値の地平から，その有効性が吟味される。今を生きる人々にとってそのテクストが必要かといった視点から，テクストが評価されることにはもちろん一定の意義があろう。批評が「野薔薇」の別ヴァージョンを読み手に想像させ，逆にテクストの価値や書かれた動機に気づかせてくれる効用もある。他方また，テクストの教材的価値を考えたとき，それが平和教材であればなおさら，テクストの読み取りに力点を置くより，子供達の今や未来に資するものであるか否かが重視されることも理解できる。

しかし読み手の現在のために批評を展開するにせよ，「野薔薇」が発表されて100年，時代は様相を変え，批評的視座も変わった。ソ連の崩壊と冷戦の解消，その後の資本主義によるグローバリゼーションの拡がりとネット社会の形成，米中の新たな対立軸の発生，環境問題の深刻化，テロリズムの横行や新型コロナウイルスの世界的感染拡大など，目に見える国家間の戦争以外にも，複雑にからみあった問題に向き合わなければならなくなった。どこに向かって平和を叫べばよいのか諸価値が錯綜する現代に，必要な価値は何か。そうした問いに読み手を向かわせるプリミティブな文学形式を備えた童話として「野薔薇」は存在している。

平和教材の見方も変わった。戦争を起こさないための行為や決意のあかしをテクストから読み取らせるだけでなく，戦争はなぜ起きたのか，どういう時代背景があって兵士は戦地へ赴いたのかといった，テクスト発表当時のコードやコンテクストをもとに解釈が行われるようになってきた。童話観も，明るい社会を志向する児童文学の向日性が戦後の経済成長とともに求められたが，そうした童話観・子供像は今では力を失っている。戦争と平和，個人と国家，生と死の問題を，美と自然の側から描いた「野薔薇」はトルストイの童話に似て，今後はさらに普遍的な価値を有する童話として読まれるようになろう。

これまでの外在批評の読み方に対し，テクストの細部・内奥まで読み取る文学研究の視点の欠如を指摘し，「野薔薇」の教材的価値の再考をうながしたのは田中榮一[5]であった。「野薔薇」の対比的構成に注目し，表現の側から子供たちの「野薔薇」理解を促し，平和への思いを深めさせることのできる童話として「野薔薇」を再評価した。しかし，「野薔薇」に見られる「咲く－枯れる，おそれの予感－実現，友情への願望－挫折，出会い・結合－別離といった対応のパターンの裡に，この作品のモチーフの志向性がかなり明確なかたちで浮彫りされてこよう」と述べ，そこに未明の「悲劇的状況への顕著な志向性」があると言い，未明文学を批判的に捉える他の評者と同じく「その世界は暗く，テーマはネガティブ」だと述べる意味で「野薔薇」のテーマそのものを揺り動かす読みを提起するにはいたっていない。

従来の「野薔薇」批判の焦点は，青年が「私の敵は他になければなりません」と言って戦地に赴くこと，及び老人がそうした青年の態度を諫めることなく，また青年の死後に故郷へ帰るところにあろう。他の評者の言葉を借りれば，「戦争を厭がってはいますが，そのために立ち上がって，何かをしようとする人間をえがいてはいないのです。むしろ，あきらめ，悲しみの中で，それを処理してしまおうとしています。これは，作家小川未明の思想そのものの弱さであろうと思われます。」[6]ということになる。

結末の２行，野薔薇が枯れる場面と老人の帰郷の場面をどう解釈するかによって「野薔薇」の解釈・評価が分かれる。野薔薇が枯れる場面を友情や平和の敗北としてマイナスに捉え，そこから厭戦気分を読み取る見方，他方，野薔薇が枯れる場面に戦争や権力・暴力といったものに抗っていこうとするプラスの強いメッセージを読み，そこから反戦思想を読み取る見方があろう。また，老人の帰郷については野薔薇が枯れ，弱々しく故郷に帰るマイナスの見方，逆に老人の帰郷に自然に従おうとするプラスの意味を見出す見方もできる。結末は多義的である。結末にどういう意味を与えるか，未明はあえて読み手にその自由を預けた。

本稿では，「野薔薇」の解釈を，大正中期の時代のコードやコンテクストに留意しながら，未明の意図の側面から，老人の帰郷の意味を積極的に捉え直してみたい。「野薔薇」は無国籍童話であるが，そこには時代性も，ナショナリズムの視点もある。それが青年の行動をうながし，老人に青年を諫めさせなかった理由であろう。野薔薇を枯れさせないようにするには，どうすればよいのか。この問いが「野薔薇」の大事な問いであることは間違いない。しかし，この問いの答えは曖昧であるどころか，野薔薇が枯れた一事を通して，平和への強い希求が読者に明瞭に伝えられていると考える。

未明は「野薔薇」の結末「それから一月ばかりしますと野薔薇が枯れてしまひました。」の後に，「その年の秋，老

人は南の方へ暇をもらつて歸りました。」の一文を付け加えた。夢のあと「一月ばかり」後に薔薇が枯れ，「その年の秋」に老人が帰郷した時系列を強調した書き方には意味があろう。老人はその間，何を思い，何を考えたのか。老人が故郷に帰ったことも，未明が大正期に影響を受けた自然に従うアナキズムの価値のコードを夢の場面を通して老人が教えられ，その生き方を実践しようとしたと解釈できるのではないか。当時は，トルストイの実践に見られるような，自然の価値に従うことがコスモポリタンな普遍的価値として，世界全体における反戦思想の拠り所ともなっていた。

本稿では，未明の意図と時代状況に着目する。大正９年の「野薔薇」執筆時点で未明は，彼の感想や批評類をふまえると，その意図として，社会変革の方法に２つの道を用意していたことが分かる。「野薔薇」に当てはめると，薔薇を枯らせる権力に対し，団結して戦うことと，自然に従うことである。後者の道を戦争に抗しえない老人の弱気やあきらめと捉えたとき，それが後に未明を転向へ向かわせたと考えさせ，さらに教科書教材としてふさわしくないと思わせた。

しかし２つの道は「野薔薇」であからさまに示されはしない。意図どおり読ませる表現になっていないところに「野薔薇」の特質がある。２つの道は未明の思いを理解する同志に対するメッセージであったのかもしれない[7]。語りすぎないことが，子供達に真の意味を読みとらせ，大事なものを胸に宿らせる方法であると考えたのかもしれない。

２　自然の摂理に関するコード

本作は，大正３年から約４年間にわたってヨーロッパを中心に行われた第一次世界大戦（1914年７月28日～1918年11月11日）が終わり，大正８（1919）年１月のパリ講和会議，６月の講和条約（ヴェルサイユ条約）批准，大正９年１月の国際連盟（日本は常任理事国）発足等を通じて醸成されていった平和への願いと，日本が一方で進めた大正７年以降のシベリア出兵（1918～1925），大正８年３月の朝鮮独立運動（三・一独立運動），５月の中国反日・反帝国主義運動（五・四運動），大正９年３月のロシアで起きた大規模な日本人虐殺事件（尼港事件）等，アジア情勢の不安定な中で書かれた。「野薔薇」は世界規模で平和が願われた時代の産物であり，日本が関わる東アジアの暗雲を意識して書かれた童話といえよう。固有名詞をもたない「野薔薇」は，本作が広い射程をもった童話であることを思わせる。

大正３年，ヨーロッパで始まった第一次世界大戦について未明は，「小数の自我に味方せん（欧州戦争観）」（「文章世界」大正３年９月）の中で，戦争を対岸の火事のようにとらえる者が多いことを嘆いたうえで，平和を希求しながら，強いられて戦争に赴かねばならない人間の不幸の側に芸術家は寄り添う必要があると述べている。ここでいう不幸な人間の代表が後の「野薔薇」の若者や老人であろう。しかし大正３年の時点では，未明がそうした者に寄り添う思いはあっても，戦争を強いる国家の強権や資本主義・帝国主義に対して戦うまでの覚悟は生まれていない。むしろ戦争は受け入れなければならない運命のように捉えられている。

小説「秋」（「廿世紀」大正３年11月）では，人間を助けるために人間を殺す戦争は利己主義の矛盾した残酷な行為であるが，個人はそれを運命として行わなければならないと言う。秋に戦争が起こったとき，「私」は祖国を守るため，美しい山河を守るため，戦わねばならないと言う。小説「路上の一人」（「新小説」大正４年１月）でも，故郷の自然を奪うものがいたら戦争も辞さないと思う主人公を登場させる。明治15年生まれの未明は，日清戦争や日露戦争を経験しながら日本の近代化が進むのを見てきた。反戦や厭戦の心と正義のために戦う心が同時に存在していた。未明は，貧しさも病気も運命であると考えた。同様に戦争も国難に処する人間の運命であると考えた[8]。

「野薔薇」において，若者は「私の敵は他になければなりません」と言って戦地に赴く。若者が戦地に向かったとき，老人は引きとめなかった。こうした事態の時代的意味を考えることが「野薔薇」の主題を考える鍵となる。国のために戦争へ行くことを当然と考える思いが，青年にも老人にもあった。戦争に一人反対する，あるいは戦争に行かずに身を隠すといった展開も今の読者には考えられるところだが，当時の人々は国家に従う強力なコードを内面化させていた。こうしたコードの存在を知っていたのが未明である。友情と国難に関する，別のベクトルをもったコードに身を引き裂かれる人々の姿を描くことが，未明にとって彼らに寄り添うことであった。

ところで，未明は「昨夜の感想」（「時事新報」大正５年６月28，29日，７月１日）において，メーテルリンクが戦争をしている間に春は来ると書いたように，自然の死は戦争とは別の次元で訪れ，幽暗の世界に人を連れていくと述べている。このことは，欧州戦争の惨状が連日報じられ，血の流れる光景が頭に響かなくなったころ，理想を求めて闘う人がふとした病気で死んでいくのを知ったことをふまえた言葉である。

「野薔薇」でも人間の営みと自然の営みを対比し，人間の営みとは別に自然が推移していく場面を描いている。

国境には，たゞ一人老人だけが殘されました。青年のゐなくなつた日から，老人は，茫然として日を送りました。野薔薇の花が咲いて，蜜蜂が，日が上ると，暮れる頃まで群がつてゐます。

「早く，暇をもらつて歸りたいものだ」と言った老人に対し，青年は「そのうちには，春が來ます」と言う。実際にやってきたのは戦争の「春」であったが，青年が戦地に向かい，老人が国境にただ一人残されたあとにも，野薔薇の花は咲いた。一般の童話などでは関連づけて利用されることの多い自然と人事の関係を，未明ははっきりと切り分ける。戦争という人事を超えたところに，自然の摂理があることを未明はここで示してみせた。

「野薔薇」と同じ頃に書かれた「平野に題す」(「読売新聞」大正９年７月26，27日）でも，「すべての者は死すべきものなり」と痛切に感じるのは，大空に浮かぶ白雲を眺めたときであると言う。人の歴史も幾百千年を数えるが，思えばそれは真に慌ただしい束の間の事実に過ぎないと言う。少年のころ，平野を歩き，石器や土器の蒐集に努めたことがあると言う「私」は，土器の破片を見ると，いまだ何も変わっていないのだと虚無的な思いを抱き，憂愁に捉えられると結ぶ。

こうした考えは未明に古くからあった。自然の優位に関するコードは「暁（「荒都断篇」五)」(「週刊朝日」大正12年10月21日）でも繰り返される。「平生，自然を忘却している人間の生活が，いかに頼りないものか」とＫは思う。「野薔薇」の老人の夢と同じように，Ｋも居眠りをしながら，子供のころ，かぼちゃ圃で遊んでいた夢を見る。自然を見つめ，自然に根を下ろしているものは間違わないと言うのが「暁」の主張である。「野薔薇」の老人が「居眠り」をしながら見た夢でも，青年が野薔薇の花の香りをかぐ。

･･･その軍隊は極めて静粛で聲を一つ立てません。やがて老人の前を通る時に青年は默禮をして，薔薇の花を嗅いだのでありました。

老人は，何か物を言はうとすると眼が醒めました。それは全く夢であつたのです。それから一月ばかりしますと野薔薇が枯れてしまひました。その年の秋，老人は南の方へ暇をもらつて歸りました。

青年の行為を通して，老人が自然から大切なものを得たことを読者に暗示させる場面となっている。野薔薇の花をかぐ青年の行為は，友情の証をなつかしむだけでなく，自然に従うことの価値を教えるものであった。

老人が帰郷したのも，夢の中で青年が野薔薇の香りをかいだことから，自然とともに生きることを選んだものと解釈できよう。「野薔薇」のテクストでは，夢の場面の意味をその前の戦争の「春」に咲く野薔薇の場面の意味と重ね合わせることが求められている。そうすれば，自然の優位に関するコードの存在が未明の意図の問題として浮かび上がる。さらに，目の前の野薔薇が不自然に枯れてしまったら，老人は自然を求めて故郷へ帰らざるをえない。そのことも，自然の優位に関するコードから推測される。

童話前半に目を向けると，自然の中で培われた人と人の関係が，国と国の関係より重要であることが記されている。「野薔薇」に登場する老人と青年の心の絆は，自然の中で育まれた。「春の日は長く，麗かに，頭の上に照り輝いてゐ」た。野薔薇には「朝早くから蜜蜂が飛んで來て集ま」り，「その快い羽音が，まだ二人の眠つてゐるうちから，夢心地に耳に聞ゑ」た。「二人は，岩間から湧き出る清水で口を漱ぎ顔を洗ひ」，「頭を上げてあたりの景色を眺め」る。

小鳥は梢の上で面白さうに囀つてゐました。白い薔薇の花からは，好い香を送って來ました。

つまり，老人が帰っていったところは，「野薔薇」前半部で語られた自然の世界であった。自然は，四季のめぐりや悠久の自然，自然の摂理の前に人事の無力を教えるものとして登場するが，一方で人間のもって生まれた境涯そのものを運命として了解するさいの原理ともなる。戦争を国民の運命と捉える視点を未明がもっていたことはすでに述べたが，「野薔薇」執筆時点においては，未明は，戦争は運命ではなく，つまり運命としての自然の摂理ではなく，人事であり，資本主義がもたらしたものであると捉え，戦争に反対していた。その意味で老人はかつての未明であり，野薔薇の形象を通して，老人が真の自然に従い，故郷へと帰っていく場面を設けることで，かつての自分と決別したと考えてもよさそうである。

3　トルストイ，平和主義的アナキズム

未明が大正期，ネオ・ロマンチシズムからアナキズムに向かっていったことはよく知られている。「五十年短きか長きか」（「東京日日新聞」昭和６年11月22日）の中で，未明は大正時代になると資本主義が発展し，貧富の格差が拡がったこと，急進インテリゲンチャーの集まりである文化学会に出席し，大正８・９年頃には著作家組合に入会，日本社会主義同盟に参加，一時期は文芸の世界でも反資本主義的文芸家の提携があったが，やがてマルキシズムとアナキズムの分裂を見たことを述べている。「記憶と感想の断片」（「早稲田文学」昭和２年６月）では，二人の子供を失い，善良で正しくあっても暴力の下に虐げられる者のあることが，自身の思想に変化をもたらし，日本社会主義同盟へ参加させたと述べている。日本社会主義同盟への参加は大正９年12月で「野薔薇」発表の半年後にあたる。

未明が信奉したアナキズムは，強制的な形態の政治的国家的ヒエラルキーに反対する運動である。社会契約された国家の形態を望ましくないと考え，自然状態に戻そうとする。未明は資本主義体制を敷く国家の体制に問題があり，一人一人の人間性を大切にする社会の実現に向けて実際の活動がなされるべきと考えた。一般にアナキズムは政治的には極左の位置に置かれ，革命戦略として暴力が用いられることを恐れられてきたが，未明が影響を受けたクロポトキンは「相互扶助」を説き，未明もまたその考え方を大切にした。

アナキズムの戦略のもう一つは，暴力の否定による平和主義であった。目的は手段を正当化するといったマルキシズムの論理を拒否し，資本主義体制に備わった暴力・戦争を同じ暴力で乗り越えることを否定した。そうしたアナキズムのもう一方の思想を守るものが，平和主義的アナキストと呼ばれる人たちである。平和主義的アナキズムの主要な戦略は市民的不服従[9]である。こうした流れを持つものは，ロシアの文豪レフ・トルストイであり，後のインド独立の指導者マハトマ・ガンディである。

自然の価値に注目する未明の文章について以下，概括する[10]。「ネオロマンチシズムと自然描写」（「新興文学」昭和３年10月）では，人間が階級闘争のみを知って，美しい夢を，追懐を，空想を持たないことは，幸福なことではない。私達を現実の苦患から救うのは，自然美の崇高と平和と，夢幻的な情趣である。美も，自由も，神秘も，恐怖も，自然の接触なくして悟りえないと言う。「作家と故郷」（「新潮」大正７年６月）では，子供の時分に私達の霊魂に目鼻をつけてくれ，悲しみや喜びを吹き込んでくれた郷土や家庭の感化は大きい。今や多くの作家は疲れている。「私」はもう一度，牧歌的精神を作品に加えていきたいと述べる。

「創作は一種の文化運動」（「新潮」大正８年８月）では，近時，世間の思潮は労働運動に集まっているが，人間的発達はこれだけによって解決できるものではない。より強く，よりよく生きるためには高潮した精神生活が必要である。人間は，美に対し，正義に対し，郷土に対し，自然に対して無限の興趣を抱いている。人間の幸福は物質によって充たされるものではなく，精神の慰安と信仰が必要であると言う。

「国民精神について」（「教育研究」昭和３年８月１日）では，封建制度が破れ，中央集権的になったとき，地方色は失われた。我等は心の故郷に帰らなければならない。「相互扶助」の愛は，共同の文化と生活を営む者の間においてのみ感じられる現象であると言う。「春・都会・田園」（初出不明，『童話雑感及小品』文化書房，昭和７年７月所収）では，自然には，かぎりない，汲みつくされざるものがある。土を耕し，土に生きる田舎では，自然の息に触れる。人は郷土の自然によって生育されたのである。自然こそ，人間を造り，個性を与えてくれるものであると言う。「人間的なもの」（初出不明，前掲『童話雑感及小品』所収）でも，自然と人間の調和した姿を考えずして，真の平和も美も存在することはないと言う。

「新文芸の自由性と起点」（「東京朝日新聞」昭和４年11月15，16日）では，暴力や権力は，何人の手で行使されたとしても反抗以外の何ものも生むものではない。人間同士の愛と同情によって結実し，「相互扶助」によってのみ産まれる。この意味からしてアナキズムの精神は，最近の哲学，現象派に影響を与えていると言う。「解放運動の曙光」（「黒旗」昭和５年１月）では，支配階級によってなされた産業の合理化による弊害に対して，無産政党はなすすべがない。彼等は人間について考えずに，組織について考えるからだ。生活の実態を愛するよりも，政治の強権に執着するからだ。農民を解放し，平和の生活を営ませるのは，アナキズムの運動だけであると言う。

こうした考えの一つの結論として，「アナーキズム文学は如何に進むべきか」（「アナーキズム文学」昭和７年６月）において未明は，排理論を掲げ，個性を尊重し，常に人生に対する正義，友愛善美の感激より出発し，トルストイのような多様な生活を活写する情緒主観の文学を提唱したいと述べている。

次に，トルストイの影響に関する未明の言及について概括しておきたい。トルストイの死は明治43年のことであった。当時，未明は「二二日の朝（トルストイの死についての感想）」（「読売新聞」明治43年12月４日）で，トルストイがネスタポールで客死したことを知り，本来，翁の説いた無抵抗主義はもっと強いものだったが，今後は，単に臆病で，自然のままに従うといった無抵抗主義が増えていくだろうと述べている。「この一日」（「新潮」大正４年11

月）では，人間が人間を殺すのは真理ではない。文明とは，人間を機械のように使わないことを言う。正義とは，無益に人間の生命や感情を犠牲にしないことを言う。ルソオもトルストイも，一個の意志が世界の意志を動かした。しかし「私」は暗黒なる悲観論者だ。世の中の裏面は想像したより暗黒である。疲れた者は休まねばならない。しかし無慈悲な飼い主は休息を与えない。「生きるだけ生きる。そして死ぬ」こう考えたとき，「私」は暗黒な深淵から救いあげられた気持ちがしたと言う。「二二日の朝」「この一日」が書かれた時期の未明の考えをふまえると，「野薔薇」の老人の帰郷には，積極的な意味は見いだせない。

しかし「文壇各種の問題」（「秀才文壇」大正７年１月）になると，トルストイの芸術は，人生のための芸術である。その中に愛がある。愛は正義である。正義は戦うものだ。真の価値ある作家は，常に人生のための芸術にむかって努力する作家である。将来，社会階級の闘争にかかる正義者の輩出が起こると言う。「二二日の朝」「この一日」と「文壇各種の問題」では，トルストイに対する未明の捉え方に変化があるのが分かる。「野薔薇」が書かれた大正９年頃には，「文壇各種の問題」で言うようなトルストイの捉え方を未明はしていた。

「民衆芸術の精神」（初出不明，大正10年９月13日作，『生活の火』大正11年７月所収）では，ミレーの絵には，田舎の百姓の生活が，無産者の多数民族の生活が描かれている。貧しい人間の生活を本当にみていたのがミレーであった。同じものはレンブラントの絵に，トルストイの芸術に見ることができる。平和な家庭にあっては，命あるものはみな同情しあう。つつましやかな生活には，愛と平和とやさしみがある。民衆の生活には，真の力が宿っている。無産者の喜びは物質的に救われること以上に，どんな苦しみも一緒にしようという愛を感じることだ。この精神をもっている芸術のみが，民衆芸術であると言う。

「トルストイ」（「真理」昭和13年２月）では，トルストイを思うとき，「私」はクロポトキンを連想する。前者には畏敬を感じ，後者には親愛を感じる。ともに人道の戦士として，真の平和と幸福をもたらそうとした。トルストイは，真の芸術や科学は，宗教的意識を基礎としなければならないと言った。クロポトキンは「相互扶助」を言ったと述べている。

トルストイは，抑圧と強制を否定する立場から，自分たちの行動は非暴力的でなければならないと考えた。その哲学はインド独立の指導者であり，アナキストを自認したマハトマ・ガンディに影響を与えた。トルストイによる平和主義的アナキズム運動，トルストイ運動は，大正期における反戦平和の一つの拠り所となっていた。だが，アナキズムは国家形態そのものを原理的に否定するものであるから，世界中ではげしい弾圧を受ける。日本における大正12年の関東大震災直後の大杉栄虐殺も国家を転覆する危険な思想家を対象として行われた。アナキストは，マルキストとともに弾圧を受け，昭和10年以前には政治的な行動を行うことはできない状態になっていた。

４　権力や暴力の現実

野薔薇の枯れるさまは，通常，物語の定法から言えば人事の悲劇にリンクする自然の変化という形で利用されるが，自然の摂理から言えば不自然である。この不自然さの描出にこそ，未明の思いがこめられていた。「野薔薇」は自然の摂理を示したうえで，人間の絆を断ち切る権力や暴力の存在を示した。戦争の「春」の中でも野薔薇が咲くこと（自然の摂理），夢の中で青年が野薔薇の香りをかぐこと（自然の摂理の再確認），枯れるはずのない野薔薇が枯れること（権力の暴走），の意味を相互に対照させて考えることが「野薔薇」の解釈を促す。野薔薇が枯れる場面を通して，未明は読み手に権力や暴力に対する抵抗の姿勢を示すための団結を呼びかけた。「野薔薇」は「悲劇的状況への顕著な志向性」のかなたに，悲劇を通して希望に向かわせる回路を用意した。自然への回帰はその方法の具体的提示であった。

「野薔薇」とほぼ同じ時期に書かれた「何故に此の不安を感ずるか」（「時事新報」大正９年５月30日，６月１日）において，未明は「いつになったら人間性が勝利を得るであろうか。」「美も真理も，権力や暴力の前には存在しない。」と述べている。この考えは「野薔薇」の主題を端的に示している。野薔薇の美は，権力や暴力の前に存在しないというわけである。個人と国家，人間性と権力といった対比関係のなかで未明は童話を捉えている。

戦争の悲惨を描いた未明童話に「強い大将の話」（「読売新聞」大正９年11月15～18日）がある。強い大将が戦争をした。大将は戦争のために荒れ果てたところを通って帰る。大将が女たちに道を尋ねたら，うそをつかれる。「年とった女は，子供が戦争に行ったのを深く悲しんでいたのでしょう」「娘は結婚したばかりの夫が戦争で死んだのを悲しんでいたのでしょう」その話を聞いた大将は，職を辞す。ここでも「野薔薇」と同じく，絆が断ち切られ，戦争の悲劇によって残された人間の不幸が描かれる。

「戦の前に」（「時事新報」大正９年４月６日）では，妥協に生きる生活がいかに醜いかと述べたうえで，芸術家は

倫理観を有し，生活は実行でなければならないと言う。忌まわしき鉄鎖を切断するためには，団結が必要であると言う。未明は社会変革を起こすために団結を求めた。その思いは，５月のメーデー参加，12月の日本社会主義同盟への参加に具体的に表されていた。未明が若き社会変革家の情熱をもって実際に行動したことは注目される。

「野薔薇」を新聞に発表した直前の連載小説「飢饉の冬」(「東京日日新聞」大正９年３月９日～３月29日）でも，改めねばならない現実の諸相が語られる。田舎に基督教が入ってきた。外国婦人は，貧しいものは幸いであると言った。しかし，おしげの父は病気で，おしげの兄が得てくる収入で生活していた。徳吉の父はポイントマンの仕事をしていたが，事故で亡くなる。雪の暮らしは単調で，人生の悲哀を感じさせた。小原の婆さんが，吹雪倒れで亡くなった。おしげの兄は，戸長から借りた鉄砲を質入れし，上州へ行ってしまった。おしげは売られる。不作の年でも年貢はとられた。「野薔薇」の直前に書かれた小説は，貧しいものは幸いであるといったキリスト教の教えを吹き飛ばす重さをもち，人生の悲哀は運命ではなく，何ものかによって強いられたものだということを伝えている。

「もう不思議でない」(「解放」大正11年６月）では，チャルメラをふいて飴を売っていた松公が，戦争に行き，人を殺して勲章をもらうが，日露戦争に出征し，戦死する。どうして松公はそんな目に遭わなければならなかったのかと言う。また，「私」はユダヤ人虐殺の写真をみる。母親が自らの手で穴を掘り，自分の子を生き埋めにさせられている写真である。なぜ母親はそんな目に遭わなければならなかったのか。物語はその後，人間の弱さや愚かさ，人間性の深淵，裏表のある人間の不思議に言及するが，「飢饉の冬」同様，運命とは言えない社会的弱者を虐げる現実の重さが描かれ，それを覆す必要があることを暗示させる。

「野薔薇」は野薔薇が枯れる場面を通じて社会変革を読者にうながす一方，帰郷する老人の姿を描いた。野薔薇が枯れる表象を通して，権力や暴力に対抗しなければならないという思いを読み手に喚起させるとともに，故郷の自然に身をゆだねる生き方も，未明が思い描く一つの社会変革のかたちとして読み手に伝えられた。後者の道は，人間の営みは，自然の営みからすれば，短い一生の出来事に過ぎないと捉える未明独自のニヒリズムを受け継ぎながらも，この時期，未明にとってはもっと積極的な意味をもっていた。自然への回帰，自然の価値に従うことが，平和主義的アナキズム，トルストイ運動，相互扶助の基点になると未明は考えた。

「野薔薇」では若者が戦地へ向かう行為や老人の沈黙に，国家の意思に従うことを当然のこととする当時の人々を支配する強いコードの存在が示されていた。それが小さい国の「みなごろし」という悲劇を生んだ。「私の敵は他になければなりません」と青年が言う「私の敵」とは，青年にとって老人以外の大きい国のことであった。将棋で熱心に敵の王を追うようなものとして，青年は戦争を捉えていた。青年や老人が捉えるべき「敵」は，コンテクストに即して言うなら，老人や青年が国難に身を挺することを当然と考える彼等に内面化されたコードであった。「野薔薇」の戦争は，もとより正義の戦争ではなかった。「利益問題」から生じた戦争であると明示されている。

老人の帰郷を通して，未明は戦争を運命と考えることを退け，自然に従うこと，もっといえばトルストイやクロポトキンの思想に共鳴する姿勢を示した。「野薔薇」は友情の大切さと戦争の悲惨さを描いた童話であるが，社会変革に向かう意欲を喚起させ，自然に従う価値を説いている。時を置いて野薔薇が枯れ，また時を置いて老人が帰郷する時間差には，それぞれ意味があった。野薔薇に向き合い老人は「一月ばかり」何を思ったのか。野薔薇が枯れたあと，老人は「その年の秋」まで何を思ったのか。野薔薇を前にして，老人は青年の戦死の意味と夢の中で青年が野薔薇の香りをかいだ意味を何度も自身に訊ねなかったか。枯れた野薔薇を前にして，老人は野薔薇が枯れた意味を何度も自身に訊ねなかったか。その時間の中で選びとられた結論が帰郷であった。自然の中に帰ることは，単純に言えば，「野薔薇」前半の自然の中に戻ることであった。国と国の関係から，人と人の関係に戻ることであった。そこには国境などなかった。

「野薔薇」における戦争は大きい国と小さい国の「利益問題」から起こった。両国の国境を守る老兵士と若者の兵士が，戦争になったことで「敵味方の関係」になり，若者が命を落とす。「利益問題」という言葉を「野薔薇」が使っているように，資本主義が帝国主義に結びつき戦争に至ると未明は考えた。そうした認識は第一次世界大戦によって，いち早くもたらされた。老人はひとり未明の分身だけではない。国難に殉ずることが運命（自然）と考える当時の人々のコードを，戦争は人事であると教えることで，自然に従うコードへ変換させることを求めた。自然に従うコードとは，抑圧と強制を強いる国家の体制から逃れ，自然状態に戻ることをいう。

5　子供の死とスペイン風邪，戦争の否定

「野薔薇」が発表された前年の大正８年１月に37歳の未明は「金の輪」を「読売新聞」に発表している。「金の輪」は，発表ひと月前の長女晴代の死（大正７年12月）を受け，自身の子供時代を描くかたちで，そこに大正３年に

亡くなった長男哲文の面影を重ね，長女晴代や長男哲文の死を弔おうとした童話である。子供の言葉を信じてやれなかった母親の冷淡な態度の後で子供が熱を出して亡くなる「金の輪」は，未明が二人の子供を失ったさいに感じたであろう親としてもっと子供に寄り添ってやりたかったと悔やむ思いを，自身を子供の側に置くことで，そのときの子供の淋しい感情を追体験すると同時に，子供に心を寄せえない無神経な親の姿を描くことで，自己処断の思いを重ね，他の子供と心を通わせたまま，西の空へ旅立つ，生の世界と死の世界が地続きになった子供の内的世界の独自性を描いた。本作は，子供と大人の世界のくい違い，世代間の断絶の悲劇を描いているようであるが，むしろそうした関係に身を置くことで，未明は自らを鞭打とうとしたように思われる。

「金の輪」は「野薔薇」の先蹤のように，太郎と太郎の友人の間で芽生えた心の通い合いを大人の無理解が破壊し，子供を生の世界から死の世界へ旅立たせる童話となっている[11]。「金の輪」も「野薔薇」も，純粋なものが不純なもの（母の無理解や利益問題）によって阻害される物語である。しかし「金の輪」と「野薔薇」には違いもある。「野薔薇」が書かれる前の大正９年１月頃，未明一家は未明を含めスペイン風邪にかかり重態に陥った。「野薔薇」の発表時期から考えると，スペイン風邪から癒えた後に本作が書かれた可能性が高い。「金の輪」が息子哲文や晴代の死後に書かれた未明の代表作であるとすれば，「野薔薇」は一家が重態に陥りながらも，皆が命を失うことなく病から癒えたあとに書かれたもう一つの代表作である。

かつて未明は，ヨーロッパの戦争を対岸の火事とみる日本人を横目で見ながら，欧州の戦争の悲惨さに正対していた。それは未明の作家としての想像力の豊かさであると同時に，長男と長女を失ったことが影響していた。「野薔薇」において春の季節の到来と同時に起こる戦争は，地球の裏側で起こっていた第一次世界大戦のことであった。「野薔薇」執筆当時においても，日本を含めた世界中で，スペイン風邪により多くの死者が出ていた。未明一家は命を失わなかった。しかし自分の子供がかつて二人病気で死んだことを思うと，未明は誰かが死んでいくことを無視することはできなかった。

大正期後半の未明は二人の子供の死を受け，失われた命に報いるかのように，若き革命家の情熱を燃やすと同時に，小説や童話を猛烈に執筆した。大正８年３月にプロレタリア文学の先駆雑誌「黒煙」（黒煙社）を誕生させ，４月に童話雑誌「おとぎの世界」の主宰を務め，７月に著作家組合員となり，８月に愛娘晴代の死を描いた小説を表題とする小説集『悩ましき外景』を出版，12月に童話集『金の輪』を出版する。スペイン風邪にかかり，命の瀬戸際に立った未明は，死にゆく子供に寄り添ってやれなかった親としての慚愧の思いに呪縛された状態から，どんなに寄り添っても奪われる命があるという地平に立つ。それが未明のスペイン風邪の経験であった。

子供の死を経験したあと，未明は戦争をはっきりと否定する。「黒煙の下」（「第三帝国」大正４年４月25日～５月25日）では，戦いは必ず正義を名目とするが，人間を殺すことが正義であろうかと言う場面がある。戦死したものと病死したものがいたら，人は戦死したものを褒め称える。しかし健康で意識の明瞭なものが命を失うのは，どれほど苦痛が伴っただろうと言う。「戦時の印象　戦争に対する感想」（「太陽」大正７年６月増刊号）では，海の彼方で戦争が起こっているのに，みなが驚かないことに奇異な感じを抱くと語る。なぜ人生から戦争を取り除く理想に向かって尽くそうとしないのかと述べる。

「あり得べからざる悲劇（尼港事件哀悼と公憤と問責）」（「日本及日本人」大正９年７月15日）では，700名の邦人が虐殺された尼港事件について，考えるさえ戦慄すべき事実だと言う。戦争を是認する国民には，このことはさまで感じないかも知れない。しかし，人間を殺してよいという思想が「私」にはおそろしい。戦争と虐殺は同じだ。殺すという思想を人類から取り去らないかぎり，悲劇は続くと述べる。「国を挙げての叫び」（「進め」大正12年８月１日）では，戦いは惨禍を人生に与える。常に戦勝を夢見る輩は，戦いによって領土を拡張し，行き詰った情勢を解決しようとするが，剣によって立つものは剣によって倒れると言う。

大正期の未明の戦争観を表すものとして小説「戦争」（「科学と文芸」大正７年１月）がある。「私」は海の彼方で戦争があることを疑っている。なぜなら，まわりがみんな笑った目つきをしているからだ。世の中には，人道主義者も社会主義者も理想主義者もいる。しかし彼等は何も言わない。長男が亡くなったときのことを忘れることができない。子供は死の苦しみをひとり経験して死んでいった。子供を弾丸の楯にすることは，あってはならない。ある日，友人Ｆに戦争についての見解を話した。彼は人間を高尚なものとは思っていないと言った。人はどんな場合においても，死ぬのは他人であって，自分ではないと思っていると言った。

「男の子を見るたびに「戦争」について考へます」（「婦人之友」昭和３年５月）では，子供を一人前に養育するのは容易ではないと言う。帝国主義は戦争が避けられない。しかしどの親が子供を機関銃の前に立たせたいであろう。正義のために一身を捧げることは正しい。しかし戦争が正義といえるだろうかと言う。「日本の作家・芸術家・思想家は戦争に対していかなる態度をとるか」（「プロレタリア文学」昭和７年９月）では，政治を肯定し，強権を肯定するかぎり，戦争は免れない。「私」はつねに人道にもとる行為はしたくないと述べる。

人に寄り添うことのできない人間への怒り，対岸の火事としてしか人の不幸を眺めることのできない傍観者的人間のありように対する怒りが未明にはあった。子供を失った未明には，そうした事態を黙って見過ごすわけにはいかなかった。戦争を否定し，暴力を否定する強い思いが未明にはあった。未明は社会変革のために団結を説いたが，暴力的な権力闘争を選びはしなかった[12]。マルキストたちが，子供達を革命の闘士として育てようとしたときも，未明は反対した。未明がアナキズムから学んだことは，相互扶助や人間性を守り育てることで豊かな未来社会を築くことであった。

6　戦争観の変化

「若き日本」（「中央公論」昭和12年10月）になると，未明の戦争観は一変する。日中戦争開戦によって未明は180度の旋回をとげる。日清戦争のとき，小学生だった未明は，教師が世界地図をひろげ，愛国の思いを語ったことを覚えていると言い，私たちも感激に胸がふるえたと言う。今また同じ国と戦うことに，40年前と同じ情熱と感激がわくと言う。自分はすでに老い，日本もまた過去の日本ではない。しかし，今の国民の精神は昔の国民の精神と変わらない。大義のために，身を捧げる犠牲的精神と報恩奉仕の至誠の感情がある。この思いがあるかぎり日本は永久に若いと言うのである。

「祖国と真実を愛するもの」（「祖国」昭和13年７月）では，辱めに対して知らぬ顔ではいられない，人道主義者は真に戦うべき場合に戦うことを忘れた空虚な博愛主義者に堕していると言う。「誠の心，誠の叫び」（初出不明，『新日本童話』竹村書房，昭和15年６月所収）では，蜂は一度刺すと死ぬが，仲間のため，巣を護るため，命を惜しまない蜂の態度を思い，彼は自分の生活を恥ずかしく思ったと言う。彼は召集令状を前に「いままでの虚偽から，矛盾から救ってくれるものは戦争ばかりだ」と誠の心の叫びをあげる。

「当面の児童文化」（「報知新聞」昭和15年12月１日～５日）では国家の目的の方針が定まった以上，児童たちはその建設のために役立てられなければならない。この戦いが，人類の平和と東洋の安寧と正義のために戦われていることを児童等に教えなければならないと言う。日本は大義のために，身を捧げる犠牲的精神と報恩奉仕の至誠の感情があると言うのである。

未明は子供の死と社会主義思想に出会う前は戦争に赴くことを悲劇的な個人の運命と考えた。社会主義時代は戦争は資本主義と帝国主義がもたらした人事と捉え，社会変革を目指すことと自然に従うことで，戦争のない平和な世の中を実現しようと考えた。しかし未明は日中戦争が始まるとその姿勢を反転させる。

もっとも社会主義から転向したのは未明だけではない。明治以降の近代化の過程のなかで古い思想，日本の儒教思想や武士道といったものと対峙することなく，新しい思想だけを取り入れたツケが昭和時代の転向となった。欧米からの侵攻に対抗するために急激に進展させなければならなかった日本の近代化という大きな課題のなかで清算できなかった古い思想が新しい思想と同居したまま明治の人間は成長した[13]。未明の中にあった『日本外史』の旧思想と『相互扶助』の新思想の同居はまさにそれであった。

未明は子供を失って以来，社会的弱者に寄り添うことを自身の心の姿勢とした。「野薔薇」の老人が結末で得た知恵は，後戻りするはずのないものであったが，未明が老人の年齢に近づいたとき，再び「若き日本」に寄り添うことを自身に許す。自然の摂理を大切にするコード以上のものを未明は見つけたのか。未明の転向については，昭和初年代の日本の過酷な思想統制の影響もあったろうし，アナキズム勢力を片隅に追いやったマルキシズム勢力に対する失望もあったろう。その議論は別稿に譲るしかない。

童話作家坪田譲治宛の手紙の中で，未明は８歳年が違う年下の坪田譲治に「私は君のことを思っていない日はないのです」と書いている。この手紙の存在を教えてくれたのは，坪田譲治研究家の山根知子氏である[14]。未明と坪田譲治の関係は「野薔薇」の老人と青年の関係に重ねられる。この手紙は大正２年に書かれたものであるから，「野薔薇」執筆に直接的な影響関係はない。しかし未明の心的傾向において，人を深く思いやる思いが「野薔薇」の執筆背景にあったことは想像できる。

未明はある随筆で，故郷の生家の前に野薔薇が咲き，蜜蜂が飛び交うところへ，数歳年上の女の子が休みがちな未明を学校に行かせるために誘いに来てくれていたと書いている[15]。この点もあわせて考えるなら，一人子であった未明が「金の輪」に登場する子供のように，いつか誰かと友達になりたいと願い，人と人の間に心を通わせることを願った，その願いの象徴が野薔薇であったとも推測される。老人を故郷に帰らせる場面を描く未明の脳裏には，自身の生家にあった野薔薇が思い描かれていたかもしれない。

「追懐と夢幻」（「読売新聞」明治42年８月29日）において未明は，未来は茫漠としているが，過去を追懐すると明

るい。過去の追懐あって，自己の存在を意識し，生存する興味を感じる。過去の追懐が詩であるように，郷土に対する追懐，人生や自然に対する追懐が生まれてくると述べている。未明のロマンチシズムは，常に過去の追懐を志向した。欠陥の多い現実を嫌い，不可知の理想郷に憧れた。それがロマンチストである未明の根幹にあった。社会の不正をただそうとする正義の思いと，故郷の自然の中で扶け合いながら制約を受けずに心豊かに暮らしたいという思いが二つながら存在したのが小川未明という作家であった。

注

1）本稿では「野薔薇」初収童話集『小さな草と太陽』（大正11年９月，赤い鳥社）の本文を用いる。未明の意図や大正期の時代状況に言及するさい，未明が用いた旧漢字旧仮名の本文もまた，その資料の一部となる。「野ばら」は「野薔薇」と表記される。

2）「野薔薇」教科書収録状況は以下のとおり（『読んでおきたい名著案内　教科書掲載作品　小・中学校編』日外アソシエーツ株式会社，2008年12月参照）。学校図書「小学校国語六年上」1971，1974，教育出版『国語六年下』1962，『新版標準国語６年下』1965，『新訂標準国語６年下』1968，『新版標準国語６年下』1971，『改訂標準国語六年下』1974，光村図書『小学新国語六年下』1965，1968，『小学新国語五年上』1977，『国語六上　創造』1986，1989，二葉『国語六年下』1959，1961。）

3）古田足日「さよなら未明－日本近代童話の本質」（『現代児童文学論』くろしお出版，昭和34年９月→『資料・戦後児童文学論集　革新と模索の時代』日本児童文学別冊　昭和55年５月偕成社所収）以降，鳥越信やいぬいとみこ等若手の児童文学作家によって展開された未明童話批判。

4）「痛い，痛い，痛いばらのとげ」（「小さい仲間」昭和32年４月→前掲『資料・戦後児童文学論集　革新と模索の時代』所収）

5）「文学教育における教材研究－小川未明「野ばら」のことなどを中心に－」（「日本文学」昭和59年８月）。田中は「野ばら」の教育実践について次の論文でも詳述している。「文学教育における指導実践形態の体系的考察に関する研究－小川未明「野ばら」の場合を例に（1）～（4）」（新潟大学教育学部紀要　人文・社会科学編）昭和57年～61年）

6）「小川未明『野ばら』」（東京都・武蔵野市第五小学校，西郷竹彦編『シリーズ文学と教育３　文学教材の分析・研究』昭和42年９月，明治図書出版，p.89）

7）「野薔薇」は大正12年，有島武郎，片上伸，嶋中雄三ほか「種蒔き社」などの発起で「三人の会」（中村吉蔵，秋田雨雀，小川未明）が開かれ，その場で「野薔薇」が朗読された。また昭和３年には左翼文芸家総連合『戦争に対する戦争』に収録された。未明が拠ったアナキズムの仲間達に理解される童話として書かれた可能性がある。

8）「私が子供の時分から，頭の中には，善い暮らしをするのも，悪い暮らしをするのも，出世をするのも，また一生不遇で終わってしまうのも，畢竟それはその人の運であって，いかんともすることのできないことだというような思想があって，どれほど私を陰鬱にさせたかしれない。」と述べたうえで，未明は都会に出て「これらの悪弊の原因がその源をすべて資本主義制度の上に発していることを知ってからは，ことごとにつけてそのことが眼に映ずるようになった。」と述べている。（「人間愛と芸術と社会主義」「野依雑誌」大正11年２月→『新選小川未明秀作随想70 ふるさとの記憶』2015年７月，蒼丘書林，pp.119-120）

9）「市民的不服従」について，『世界大百科事典　第２版』（平凡社）には「みずからの良心が不正とみなす国家・政府の行為に対しては，法律をあえて破っても抵抗するという思想と行動をさす。行動の代表に納税や兵役の拒否がある。」とある。

10）概括で用いた資料は，小埜裕二編『人物書誌大系45　小川未明Ⅱ全小説・随筆』（日外アソシエーツ，平成28年６月）。

11）本節の「野薔薇」とスペイン風邪の関係については，拙稿「小川未明「金の輪」「野ばら」とスペイン風邪」（「新潟教弘会だより」令和２年５月）に拠るところが多い。本論の展開の必要から，本節に引用した。

12）「文芸の二問題－指標としての正義，自由－」（「読売新聞」昭和２年３月17日～18日）で，未明は興味深いことを書いている。「私」は必ずしも手段として政治を否定しない点において，無政府主義者ではない。また自由，正義を高唱するゆえに，共産主義者でもない。文芸が目的であるかぎり，永久に，正義，自由を叫ぶと言うのである。昭和２年時点での未明の最も高揚した社会変革への思いが記されている。

13）丸山眞男『日本の思想』（岩波書店，昭和36年11月）の考え方に拠る。なお，拙稿「小川未明の「第一義」と人間力」（『「人間力」を考える－上越教育大学からの提言５－』上越教育大学出版会，令和２年３月）においても，丸山眞男のこの考え方を紹介し，未明の転向について言及した。

14）小川未明文学館講座（令和元年11月30日，小川未明文学館）における山根知子氏の講演「小川未明と坪田譲治の師弟愛－「私は君のことを思わない日はない」－」での指摘に拠る。

15）「野薔薇の花（忘れ得ぬ人々）」（「文章倶楽部」大正７年４月）

Ogawa Mimei's "Wild Rose" and War:
Depicting Nature and Homecoming

Yuji ONO*

ABSTRACT

The purpose of this paper is to revisit the end of Ogawa Mimei's fairy tale "Nobara," which allows for ambiguous interpretations based on the author's intentions and the circumstances of the times.

By depicting the withering of a wild rose, Mimei reminds readers to stand against power and violence and conveys a way of life that follows nature.

For Mimei at this time, with his nihilism combined with the influence of Tolstoy and Kropotkin, obeying nature was to deny the state system that promotes oppression and coercion and actively practice anarchism.

By describing the scene in which a wild rose wilts unnaturally, Mimei teaches the old man that war is forced, not destined, and that it was necessary to resist it by returning to nature.

* Humanities and Social Studies Education